

Title	イスラムはどう語られたか? : 国際テロ報道におけるイスラム解説の談話分析
Sub Title	How did they talk about Islam? : A discourse analysis of commentary on Islam in media coverage of international terrorism
Author	福田, 充(Fukuda, Mitsuru)
Publisher	慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
Publication year	2007
Jtitle	メディア・コミュニケーション : 慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要 (Keio media communications research). No.57 (2007. 3) ,p.49- 65
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : 外国関連報道が構築する世界像(2)
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20070300-0049

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

イスラムはどう語られたか？

国際テロ報道におけるイスラム解説の談話分析

福田 充



▶ 1 イスラム報道の特性

今日「イスラム」の言葉が使われる時、ひとつの単純なことを意味するようだが、実はある部分はフィクション、ある部分はイデオロギー上のレッテル、またある部分はイスラムと呼ばれる宗教の最短の呼称である。西洋の共通の慣用による「イスラム」と、八億以上の民衆、アフリカとアジアを中心とする数百平方マイルの土地、多くの社会、国家、歴史、地理、文化をもつイスラム世界で進行中のきわめて多様な生活との間には、真に意味のある直接のつながりは何もないのである。(中略)ここ数年間、とくにイランの出来事が欧米の注意を強く引いて以来、メディアはイスラムを報道してきた。イスラムを描写し、性格づけ、分断し、インスタントの講座を開き、その結果、イスラムを「わからせた」のである。 Said (1981 = 1986) 『イスラム報道』 p.2

Said (1981) によれば、イスラムの問題は極めてメディアの表象の問題であるといえる。彼が『イスラム報道』の中で指摘しているように、イスラムの根本的な問題は、イスラムという異文化をメディア言説の中でどのように理解するか、という問題とみなすことができる。メディアが作り出すイスラムに関するディスコースを、読み手はどのように受容し、その結果、どのようにステレオタイプが形成されるのだろうか。

Saidは、メディアが作るイスラム像の特徴を以下の5点に整理している。

- 1) イスラム特有の像が提供されている
- 2) 全体としてその意味やメッセージが限定される
- 3) 対決的な政治状況がつくられ、「われわれ」と「イスラム」に敵対させている
- 4) この矮小化されたイスラムのイメージは、イスラム世界そのものにも明白な結果をもたらした
- 5) マスコミの描くイスラムおよびイスラムに対する文化的態度が、「イスラム」についてだけでなく、文化の制度、情報や知識の政治、そして国家政策についても多くのことを教えてくれる

当時のアメリカにとっては、イスラエル、パレスチナ問題、石油問題、テロ問題、文化帝国主義、すべての西洋に対するアンチのベクトルが収束する場がイスラムであり、メディアがそのイスラムを表象している。彼は、このようにイスラムについて語り、報道し、理解するプロセスを「解釈の社会集団」と呼び、その生成過程を問題とした。

Saidは以下のように指摘している。70年代までのイスラムは、石油供給問題などによって西洋メディアに表象される場合、経済的に対立するイラン人やトルコ人といった国家カテゴリーとして表象されてきたが、イラン革命以後、80年代以降において、イスラムは西洋に政治的・宗教的に対立するイスラム教徒としての宗教カテゴリーとして表象

され始めたことを指摘している。その契機となったのが、イラン革命であり、アメリカ大使館人質テロ事件とそのマスコミ報道のあり方である。テロリズムとメディアの研究の文脈において、Necos (1994) もこのアメリカ大使館人質テロ事件におけるテレビニュース報道を分析しているが、これは人質家族の談話をトランスクリプト化することによって、いかにニュース報道がテロ対策に影響を与えたか、という視点によるものであり、サイドのこの指摘の対立軸にあるものといえる(福田:2006a)。

Saidは、イスラムの問題に関して、ニュース報道がなした機能は「レッテル貼り」であったと指摘する。彼のいうレッテル貼りによるラベリング機能には、単純な身元確認の機能と、途方もない一般化の2種類が存在する。ここで問題なのは、後者の「途方もない一般化」であり、本来のイスラムは多様な社会、歴史や言語を持つにもかかわらず、ニュース報道の中でのイスラムは、依然として宗教的、未開、後進性のイメージで一般化される。サイドの言い方を借りれば、イスラムには、教会と国家、宗教と日常生活の一体化が許されているのである。

途方もなく大きく複雑な現実にはレッテルを貼ろうとすれば、それは周知のごとくあいまいになるのもやむをえないだろう。「イスラム」が不正確でイデオロギーを満載したレッテルだというのが本当ならば、「西洋」「キリスト教」という言葉も同じく当然問題になる。 Said (1981 = 1986) p.34

さらに、Saidが指摘するのは、ニュース報道によるイスラムの単純化、矮小化である。イラン革命、アメリカ大使館人質事件での、アメリカ国内でのイスラム報道は、イランにおけるこれらの現象のうち宗教的で、原理主義的で、過激な側面ばかりにフォーカスが当てられ、クローズアップされた。彼は、こうした単純化され、矮小化されたイスラム報道によって、イスラムがイデオロギー的、人種主義的な対抗勢力として表象されたばかりか、イスラム=テロといったイメージが先行するにいたったと指摘する。Saidはこうしたイスラム報道に対して、「ほかの国民や社会をそんな単純かつ類型化した核に矮小化すべきではない」と反論し、「端的に言って無礼である」とまで述べている。本来非常に多様であり、複雑な現象であるはずのイスラムが、このようなイスラム報道におけるレッテル貼りによって、どのようにして一般化され、単純化され、矮小化されながら、ステレオタイプとして表象されるのであろうか。この問題は、日本におけるニュース報道においても同じく発生している可能性がある。

Van Dijk (1988) がテレビや新聞のニュースを談話 (discourse) として分析したように、また、Fairclough (1995) がニュース番組の娯楽化、公的言語の会話化を指摘する文脈で番組司会者の「会話実践」を分析したように、ニュース番組に登場するキャスター、解説者、コメンテーター等がスタジオで、サウンドバイトで構成する対話を談話分析、さらには会話分析することによって、これらの国際ニュースの中で、イスラムがどのように語られ、どのように表象されているかを分析できるのではないだろうか。そのために本論文では、1) ニュースに登場するアクターのネットワーク構造から表象される「イスラム問題」、2) ニュースで対話されるダイアロジカル・ネットワークから表象されるイスラム、3) 成員カテゴリー化装置で構成されるイスラム像の3つのアプローチから、テレビニュースにおいてイスラムがどのように表象されたかを分析する。

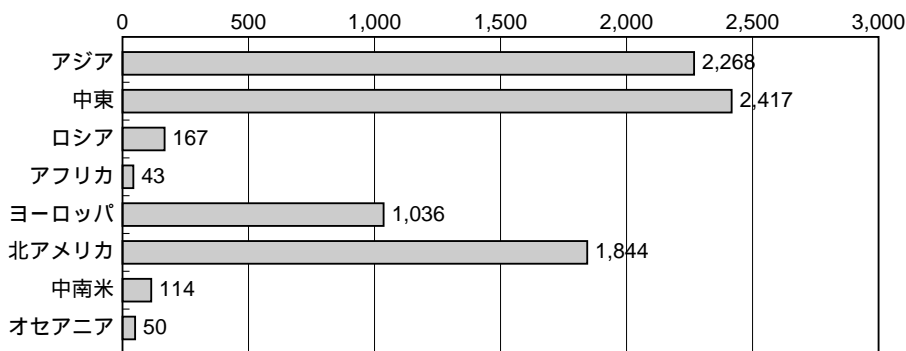
▶ 2 研究概要

本研究で分析対象となった2003年11月から10ヶ月間に日本のテレビ局3局のニュース番組(NHK「ニュース10」、TBS「ニュース23」、テレビ朝日「ニュースステーション」)

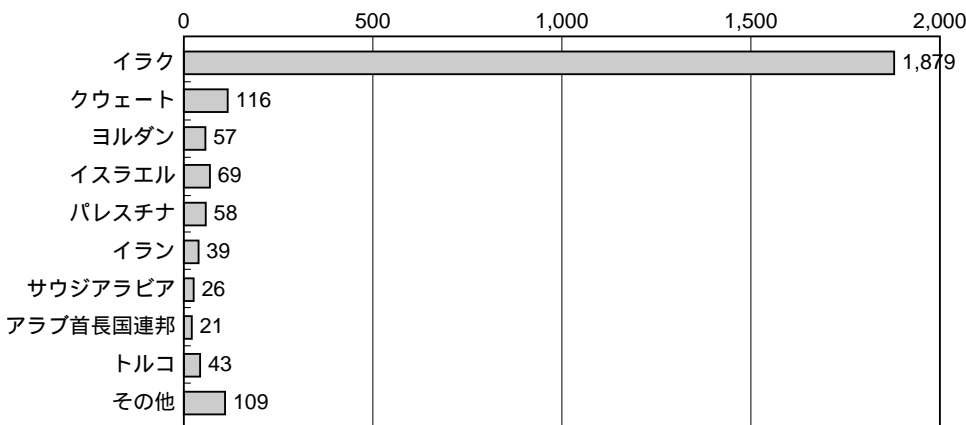
「報道ステーション」で報道された外国関連報道を集計すると、全体では4,253項目、放送時間量にして195時間22分23秒（703,343秒）であった。その内訳を示すと、NHKで1,512項目（246,678秒）、TBSで1,445項目（209,241秒）、テレビ朝日で1,296項目（247,404秒）であった。3局の特徴を示すと、放送時間量的に大きな差は見られなかったが、ニュースの項目数でNHKがもっとも多く、ついでTBS、テレビ朝日という順番で少なくなることがわかった。これは、1項目のニュースあたりの時間量が番組によって異なることに起因するものであると考えられる。では、その国際ニュースの中で、どのような国が多く報道されたのだろうか。国別に報道量（ニュース項目）の傾向を示したのが図表1である（国際ニュース報道の量的分析については、萩原（2006）を参照）。

これを見ると、日本の周辺国家である中国、韓国、北朝鮮などが属するアジアや、アメリカ、ヨーロッパをおさえて、イスラム諸国が該当する中東地域の報道量ももっとも多いことがわかる。さらに、この中東地域の中での国別報道量を示したのが図表2である。これをみると、中東地域の報道のほとんどがイラク関連のニュースであることがわかる。これは、イラク戦争後のイラク復興の問題、イラクでのテロ事件、自衛隊のイラク派遣問題などのニュースがこの時期に集中していたことに起因するものであり、まさに、イスラム報道の問題は、この時期において報道量的にも最重要問題の一つであったといえる。本研究では、このイラクを中心としたイスラム関連報道を抽出し、トランス

図表1 国際ニュースの中でカバーされた国・地域の内訳（ニュース項目数）



図表2 国際ニュースの中でカバーされた中東の国・地域の内訳（ニュース項目数）



クリプト化することによって、上記のテレビニュース番組における、イスラム報道の特性を分析した。

▶ 3 ニュースのダイアロジカル・ネットワークから表象されるイスラム

最初に、実際のテレビニュースにおいてイスラム問題がどのような構造で表象されているかを、サウンドバイトによるアクター間のネットワーク構造で分析する。そのために、イスラム関連のニュースの一例から詳細なトランスクリプトを作成した。

図表3は、2003年11月18日(火)に放映されたテレビ朝日の『ニュースステーション』のニュースである。「東京テロ予告の深刻 泥沼イラクと自衛隊」というタイトルで、テロ組織アルカイダが、「日本が同盟軍支援のためイラクへ自衛隊を派遣すれば、日本の首都、心臓部を攻撃する」と日本へ警告したとカタールの衛星テレビ局アルジャジーラが伝えたことをもとにニュースが構成されている。そのニュースの全体をトランスクリプト化したものであるが、この約5分半のニュースの中に、アルジャジーラ・男性キャスター、高橋和夫・放送大学助教授、ザワヒリ師、覆面の武装グループ、ピンラディン師、小泉純一郎首相、キミット准将、イラク市民、ブッシュ大統領、ロンドン・山本裕之記者、リビングストン市長(ロンドン)の、合計11個ものサウンドバイトがひとつのニュースに織り込まれている。そして、それぞれのサウンドバイトが、映像と音声のモダリティを持ちながら個々の立場からのディスコースを構成している。

まず、アルジャジーラの男性キャスターのトーキングヘッドで始まるニュースで、日本が自衛隊をイラクへ派遣すれば日本の首都を攻撃するとする、アルカイダの声明を紹介している。そして、放送大学の高橋和夫助教授の「日本だけが例外とは考えない方が安全」とするコメントを続け、ザワヒリ師がアメリカに追隨する諸国に警告するサウンドバイトが紹介されている。さらに、覆面をした武装集団のテロ声明と、ピンラディンの声明が続けられ、これまでもテロの標的となった国があることが示される。さらに追い打ちをかけるように、高橋助教授は「すでに着々と準備が進んでいるとみた方がいい」と、テロの不安をあおるコメントを続ける。それに対して、日本の小泉首相の「テロリストの脅迫には屈してはならない」という、あくまでも自衛隊派遣を強調するサウンドバイトが紹介される。一方、そのイラクでは、アメリカ軍が掃討作戦を行い、その結果多くの市民が戦闘に巻き込まれた。その様子がキミット准将のインタビューと、イラク市民のイグゼンプラーで紹介される。その後、ブッシュ大統領の「アルカイダはいつでもどこでも罪のない人を殺す」というサウンドバイトが流され、そのブッシュ大統領が滞在するロンドンでの状況が記者から報告され、そのブッシュ大統領に批判的なロンドンのリビングストン市長のインタビューが紹介された。このアルジャジーラとテレビ朝日が行っているニュース報道自体が、アルカイダのテロ声明を世界に発信することに荷担する効果をもっていることも否めないが、同時に、テロ対策に対して敏感になる世論を喚起させる効果も持っているといえる。

ニュースに登場するアクター(登場人物)のサウンドバイトによって、このイラクの状況やテロ予告の問題が構造的に表象されていると考えることができる。このニュース・ディスコースがイスラム問題の表象をフレーム化しているのである。是永・酒井(2005)はメディアのディスコースのあり方を、登場するアクター間の関係性から考察しているが、このニュースの談話もアクター間のネットワークによって構成されていると考えることができる。その構造をネットワーク・モデルで示すと図表4のようになる。

図表3 2003年11月18日(火)テレビ朝日『ニュースステーション』のトランスクリプト

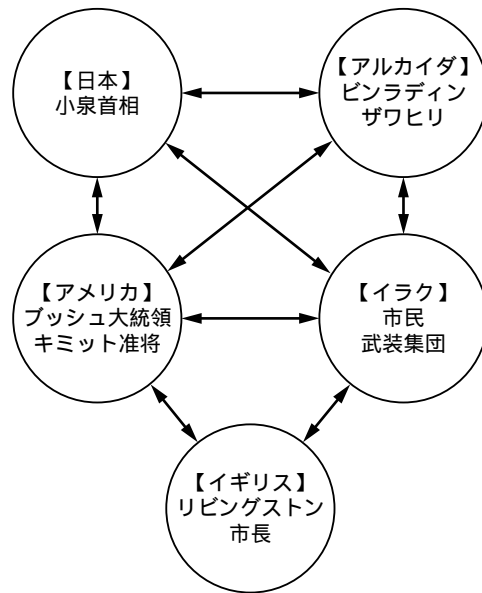
時間	映像	ナレーション/サウンドバイト	テロップ
0:18:04	アルジャジーラTVのロゴ 右上にテレビ朝日のロゴ		
0:18:09	イラク地図 日本とその周辺の地図	(キャスターが話している)	「アルジャジーラTV」 「アルカイダは「日本が同盟軍支援のためにイラクへ自衛隊を派遣すれば 日本の首都・心臓部を攻撃する」と警告しています」 「東京テロ」予告の深層泥沼イラクと自衛隊
0:18:21	男性ニュースキャスターの映像 背後にビンラディンとテロ現場の映像 日本とその周辺の地図	(キャスターが話している) 突然にして舞い込んできた日本への警告 中東情勢に詳しい高橋助教授はテロの危機は現実的なものだと言及する	「東京テロ」予告の深層泥沼イラクと自衛隊
0:18:29	放送大学 高橋助教授の映像	アルカイダはある意味で有言実行タイプのテロリスト組織ですよ で、日本だけが例外だとは思えないほうが安全だと思います	「東京テロ」予告の深層泥沼イラクと自衛隊 「放送大学高橋和夫助教授」 「アルカイダは有言実行タイプのテロリスト組織 日本だけが例外と考えないほうが安全」
0:18:41	迷彩を着た人々の映像 ビンラディンが人々に囲まれている映像 ザワヒリ師とビンラディンが並んで歩いている映像	実際、アルカイダは犯行声明を実行してきた 八月に出されたアルカイダナンバー 2 ザワヒリ師が出した声明	「東京テロ」予告の深層泥沼イラクと自衛隊 アルカイダのナンバー 2 ザワヒリ師
0:18:52	ザワヒリ師の顔 (ニュース映像) アラビア語でテロップが表示されている	ザワヒリ師が話している	「東京テロ」予告の深層泥沼イラクと自衛隊 「8月3日」 「アメリカに協力する者たちはすべて我々の攻撃を受けることになるだろう」
0:19:04	バクダッド国連事務所爆弾テロの現場映像 軍隊が担架を運ぶ映像	(サイレンの音) その半月後、バクダッドの国連事務所爆弾テロが起きた デメロ国連事務所総長特別代表ら24人が死亡した	「東京テロ」予告の深層泥沼イラクと自衛隊 「8月19日バクダッド国連事務所爆弾テロ」
0:19:15	覆面をして機関銃を持った人々が声明を出している場面のニュース映像 覆面をして、機関銃をもっている2人のアップ	(話している)	「東京テロ」予告の深層泥沼イラクと自衛隊 アラビア語のテロップ 「8月26日」 「国連事務所で行ったことは イラク駐留軍の言いなりになっていることの結果だ」
0:19:24	男性ニュースキャスターの映像 背後にビンラディンの映像	そして、先月出されたビンラディンの声明	「東京テロ」予告の深層泥沼イラクと自衛隊 アラビア語のニュース番組のテロップ
0:19:28	ビンラディンが岩の前で話をしている写真を写したニュース番組の映像	(ビンラディンの音声)	「東京テロ」予告の深層泥沼イラクと自衛隊 「先月18日」 「適切な時期と場所でイギリス、スペイン、ポーランド、オーストラリア、日本、イタリアに報復する権利がある」
0:19:40	煙りのなか放水が行われているテロ現場の映像 瓦礫のなか人々が歩く映像	ポーランド、イギリス、イタリア、名指された国は次々と標的になった	「東京テロ」予告の深層泥沼イラクと自衛隊 6日 ポーランド軍少佐・待ち伏せ攻撃 9日 イギリス軍兵士・爆死 12日 イタリア軍警察本部・自爆攻撃
0:19:47	放送大学 高橋助教授の映像	ま、彼らの手口から見て、もし日本で何かことを起こすとすれば、すでに着々と準備を進めているというふうにみた方がいいですね	「東京テロ」予告の深層泥沼イラクと自衛隊 「放送大学 高橋和夫助教授」 「もし日本で何かを起こすとすれば、すでに着々と準備を進めているとみた方がいい」
0:19:57	小泉総理が金髪の女性と握手をする映像 カメラに囲まれながら金髪の女性に導かれ、席に座る小泉総理	しかし小泉総理は自衛隊の派遣にあくまでこだわって アメリカのCNNとのインタビューでも自衛隊派遣を強調した	「東京テロ」予告の深層泥沼イラクと自衛隊 「総理官邸きょう午後」
0:20:08	小泉総理が花と国旗を背景にインタビューに答える映像 CNN女性記者が小泉総理に質問する映像 再び小泉総理の映像	テロリストの脅迫には屈してはならないと思っています テロとの戦いというのは全世界共通です (女性記者の英語による質問) But is it worth putting Japanese people at greater risk just for the sake of sending a small and largely symbolic group of self-defense forces to Iraq. 自衛隊でも復興支援・人道支援に活躍できる分野はあると思っています	「東京テロ」予告の深層泥沼イラクと自衛隊 「でも小規模な自衛隊を大々的に派遣して国民にリスクを迫らせる価値はある？」
0:20:36	アメリカ軍が攻撃する映像	(アメリカ軍の爆弾を発射する現場の音声) アメリカ軍は戦闘機や武装ヘリ、そして戦車を使って大規模な攻撃を行った アイアンハンマーと名付けられた掃討作戦の一環で、標的は反米武装勢力の拠点とみられる施設	「東京テロ」予告の深層泥沼イラクと自衛隊 「作戦名：アイアンハンマー」 「標的：反米武装勢力の拠点」
0:20:57	機関銃をとりつけられたジープを運転するアメリカ軍の映像	(アメリカ軍のジープが砂漠を走る走行音) イラク北部に位置するキルクークではこれまで使用していない精密兵器も投入された	「東京テロ」予告の深層泥沼イラクと自衛隊 「キルクーク17日」
0:21:04	砂漠で作業するアメリカ軍の映像	(緊張感をあおるBGM)	「東京テロ」予告の深層泥沼イラクと自衛隊 「バド近郊(バクダッドの来た70km)では銃撃により米軍兵士2人死亡2人負傷」
0:21:11	報道陣に答えるキミット准将の映像	(緊張感をあおるBGM) (英語で答えるキミット准将の音声)	「東京テロ」予告の深層泥沼イラクと自衛隊 「バクダッド17日」 「米占領軍キミット准将」 「この24時間で我々は1,729回のパトロールと25回の攻撃を行い 99人の武装勢力を拘束した」
0:21:22	アメリカ軍により破壊された廃墟と市民の映像	しかし、アメリカ軍の爆弾はイラク市民の家も粉々に砕いた	「東京テロ」予告の深層泥沼イラクと自衛隊 「ティクリート17日」

時間	映像	ナレーション/サウンドバイト	テロップ
0:21:30	廃墟を背後に泣きながら手をふりかざし怒りを訴える女性の映像	(女性の音声)	「『東京テロ』予告の深層泥沼イラクと自衛隊」 「みんな壊されたわ お金も家もなくなった 子供たちも病気で これからどうすればいいの」
0:21:42	廃墟を歩く市民の映像 黒い服を着た女性が歩く映像 怒りをあらわにしている男性の映像 顔を覆ってなく老女の映像	ブッシュ大統領の戦闘終結宣言から六ヶ月半、イラク市民を解放するはずだった戦争は未だに市民を苦しめている	「『東京テロ』予告の深層泥沼イラクと自衛隊」 「『戦闘終結』から6ヶ月半」
0:21:52	黒い服を着た女性が口を黒い頭巾と手で押さえて泣きながら訴える映像	(女性が泣きながら何事かを訴えている音声)	「『東京テロ』予告の深層泥沼イラクと自衛隊」
0:21:56	ブッシュ大統領のインタビュー映像	(ブッシュ大統領が英語でインタビューに答える音声)	「『東京テロ』予告の深層 泥沼イラクと自衛隊」 「ワシントンDC 17日」 「ブッシュ大統領」 「アルカイダはいつでもどこでも罪のない人を殺す」
0:22:02	イラク人女性に囲まれて話すブッシュ大統領の映像 ブッシュ大統領の顔のアップ カラーからモノクロに変わる	イラク人女性を前にアルカイダの卑劣さを強調したブッシュ大統領はもっとも親しい盟友の国へ向かったしかし	「『東京テロ』予告の深層 泥沼イラクと自衛隊」 「イラク人女性団と面会後 “盟友の国” イギリスへ」
0:22:15	深夜にバッキンガム宮殿の門上部によじ登り、星条旗を逆さまにはりつけている女性の映像		「『東京テロ』予告の深層泥沼イラクと自衛隊」 「ロンドン 17日」 「大統領が泊まるバッキンガム宮殿では星条旗をさかさまに掲げる女性が・・・」
0:22:22	街路樹にイギリス国旗と星条旗が掲げられ、その通りを車が走る映像	イギリス国内では戦争反対の気運が最高潮だ	「『東京テロ』予告の深層 泥沼イラクと自衛隊」
0:22:26	警官が馬に乗ってパトロールする映像 通り脇で、パトカーを背後に、警備にあたる警官の映像	ブッシュ大統領が滞在するロンドンでは、およそ1万5,000人の警官が警備にあっている	「『東京テロ』予告の深層 泥沼イラクと自衛隊」 「動員警官 1万5,000人(当初予定の3倍)」 「警備費用 500万ポンド(約9億3,000万円)」
0:22:33	「STOP BUSH DEMO・・・」の張り紙	ブッシュ大統領の敵は過激派だけではない	「『東京テロ』予告の深層 泥沼イラクと自衛隊」 「思わぬ敵も・・・」
0:22:38	日本人記者がバッキンガム宮殿を背後に、新聞を3紙持って、レポートしている映像	新聞各紙は大統領訪問に反対するロンドン市長の意見を載せるなど、反対運動の広がりを報じています	「『東京テロ』予告の深層 泥沼イラクと自衛隊」 「report 山本 裕之 ロンドン」
0:22:46	ロンドン市長がインタビューに答える映像 カラーからモノクロへ変わる	なんとロンドン市長がブッシュ大統領を「地球の生命に対する最大の脅威 彼の政策は人類を絶滅に導く」とこきおろしたのだ	「『東京テロ』予告の深層 泥沼イラクと自衛隊」 「ロンドン市長リビングストン氏(ブッシュ大統領の顔写真)は地球の生命に対する最大の脅威」「(ブッシュ大統領の顔写真)の政策は人類を絶滅に導く」
0:23:01	デモの段幕の映像 「BUSH NOT WELCOME・・・」 「STOP BUSH」の大量の張り紙がうつされた映像	20日には市内で10万人規模のデモが予定されている	「『東京テロ』予告の深層泥沼イラクと自衛隊」 「20にはトラファルガー広場で10万人規模の反戦デモを予定」
0:23:05	デモ看板を作っている映像 ブッシュ大統領の像が引き倒される映像	集会ではブッシュ大統領の像をひき倒すイベントも計画されているという	「『東京テロ』予告の深層 泥沼イラクと自衛隊」 「ブッシュ大統領の像を引き倒すイベントもあるという」
0:23:13	久米キャスターが原稿を読む映像	えー、先ほど入ってきたニュースです。バクダッドの日本大使館のそばで18日未明何者かによる発砲がありました。これに対抗するため、大使館の警備員が発砲したところ、複数と見られる犯人は車で逃走したということです。この事件だけが人は出ていません。バクダッドの日本大使館員によりますと、「向こうから撃ってきた。警備のイラク人が撃ち返した。時間にして1、2分がもう少し長かったかもしれない」とのことです。	「未明の発砲事件 日本大使館狙った？」 (中央に番組の提供が出ている)
0:23:42	久米キャスターが原稿を揃えながら話す映像 番組キャスター、解説者4人のうつった映像 清水解説員の映像	このアルカイダのもし自衛隊をイラクに派遣したら 東京 都心で報復をするという声明は気にするなっつても無理ですよね。 それでも私はね、あー、サダム・フセインとかビンラディンの警告は自分の声でメッセージ出してますから、声紋分析で本人かどうかある程度わかるでしょ。今度のあの東京を攻撃するぞって電子メールなんですよ。だからアルカイダの訓練センター司令官と名乗ってはいるけれど、本当にそうなのかわからないですね。もしかしら、他のイスラム過激派がびん・・・アルカイダに便乗している可能性だってある。そのことを私、考えに入れておいた方がいいと思うんですね。	「朝日新聞編集委員 清水建宇 NEWSSTATION」

そしてそれを伝えるレポーターの役割、解説する解説者の役割演技のコミュニケーションによって、これらの談話はつながりを保っている。このニュースによって構造化されたフレームは、視聴者における問題認識のスキーマ形成に影響を与えるのではない。

このアプローチはこれまでのニュースの談話分析的アプローチとは異なるものである。例えば、ニュースの談話分析研究で知られる Van Dijk (1988) は、ニュースが持つ談話的構造をあらわす概念として「ニュース・スキーマ (news schema) という概念を提示

図表4 11月18日(水)ニュースのアクター間のネットワーク構造



している。彼はニュース・スキーマを、「スーパー構造スキーマ」(superstructure schema)と「テーマ構造スキーマ」(thematic structure schema)の2種類に分類しているが、ニュースのスーパー構造スキーマとは、ニュースの談話をヘッドラインとリードからなるサマリーと、エピソードとコンテクスト、コメントからなるストーリーとからなるディスコースとして分析するもので、主にニュースの形式的構造をとらえるものであった。また、テーマ構造スキーマとは、ニュースを構成するエピソード群の意味内容の構造をスキーマ化したものである。ニュース・エピソードは「発生原因・条件」(歴史やコンテクストからなる)と「具体的なエピソード」(主な出来事、結果からなる)から構成されるように、ニュースを構成する意味内容の構造をスキーマ化したもので、彼はこのアプローチでレバノン首相暗殺事件のニュースを分析している。Van Dijkらの伝統的な談話分析のアプローチと異なり、アクター間のネットワーク構造を示すことに、どのような意味があるだろうか。

例えば、このニュースに登場するアクター同士は、実際には会っていない。にもかかわらずニュース上の談話同士がネットワークとしてダイアローグを形成している。このように、ニュース・ディスコースがそれぞれ自体独自の、独特の対話的構造を持っていると考えるアプローチをダイアロジカル・ネットワーク (dialogical network) と呼ぶ。メディア・テキストとしてのニュース・ディスコースが、「対話」を取り結んでいる状態、つまりネットワークを形成しているのである。このダイアロジカル・ネットワークは、Leuder & Nekvapil (2000) が提唱した概念で、メディア・テキストをそれまでの談話分析のようにモノローグ=独話として分析するのではなく、テレビニュースなどのメディア・テキスト自体がインタビューや講演、記者会見などをサウンドバイトとして編集し、その編集されたサウンドバイト同士がダイアローグ=対話を形成するネットワークとして成立しているものとする。そして、このダイアローグは、談話分析や会話分析などのコミュニケーション分析の対象となりうる。例えば、Leuder, Marsland & Nekvapil (2004) は、911同時多発テロ事件に関するニュース番組を分析し、そのニュース・ディ

スコースの中で、ブッシュ大統領やブレア首相、オサマ・ビンラディンらは直接会っていないにもかかわらず、どのようにしてお互いの発言をひきとり、引用しながら、テロ事件以後の「我々(us)/彼ら(them)」というカテゴリカルな線引きをどのようにして行っていたのかという成員カテゴリー分析のアプローチから分析を行っている。

図表3のニュースに戻ると、このニュースはアルジャジーラのニュースを導入部分として参照することから始まり、その中で紹介されたアルカイダのテロ予告声明「日本が同盟軍支援のためにイラクへ自衛隊を派遣すれば、日本の首都・心臓部を攻撃する」という談話を引き継ぐ形で、それにまつわる談話がモザイク状に、パッチワークのようにちりばめられる。時間や空間を超えて、ザワヒリ師やビンラディンが登場し、それに対立する勢力としてアメリカのブッシュ大統領や日本の小泉首相の談話がサウンドバイトとして繋がれる。このザワヒリ師やビンラディンらを、われわれの社会と敵対するものとして表象することを可能にしているのも高橋助教授の言う「彼ら(they)」というカテゴリーであるとみなすこともできる。そして、そのブッシュ大統領が盟友として頼みにするイギリスを訪ねているニュースへと展開し、その滞在先のロンドンのリビングストン市長がブッシュ大統領を批判している演説と、イギリスのデモが紹介される。

このニュースは、空間軸上に国際的な広がりを持たせながら、バラバラに存在している事実をニュース編集でつなげることによって、ひとつの「結束性(coherence)」を持たせることに成功している。そして、そのニュースが時間軸上に連なることによって、さまざまな因果関係を憶測させる結束性を持たせる。例えばこのニュースの構造から、アルカイダのテロ予告が原因となって、テロの標的となっているイギリスの市民たちのデモがあり、それに強行的な姿勢を示すブッシュ大統領に対してリビングストン市長の批判が発生しているというような、因果関係を想定する解釈が成り立つ。このような「間テキスト性」がテレビニュースの談話には存在する。つまりこの結束性を持たせることに成功している間テキスト性は、これらのサウンドバイトとしての談話がダイアロジカルな構造を持たされていることによって成立していると解釈できる。つまり、ニュースの制作者は、これらのサウンドバイト、談話を一連のつながりをもって「見せよう」としているのであり、視聴者はそのダイアロジカルな談話からこの問題を「理解しよう」とするその相互作用が、このニュースの中に見てとれる。ダイアロジカル・ネットワークから、ニュース・ディスコースを分析することは、送り手のジャーナリストがもつ意図や認識を明らかにすることにつながる一方で、反対に、そのニュース・ディスコースを受け取る受け手のニュース理解のプロセス、スキーマ形成に関して分析することに両方向的に役立つといえる。

さらにこのニュースの後半で、久米キャスターが伝えたバグダッド日本大使館の発砲事件も、それまでのテロ予告ニュースと結束性を持って表象される。情報が前後して配置される「時間的序列」や、情報が近く隣り合って配置される「隣接関係」によっても、間テキスト性は維持される。アルカイダのテロ予告とこのバグダッド日本大使館発砲事件が、関連性を持って解釈されることが可能となる。

このようなニュースの構造は決して珍しいものではない。例えば、図表5は、サドル師支持者のシーア派がデモを起こして駐留軍と衝突し、死者が発生したニュースをトランスクリプト化したものであるが、このように不安定な状況にあるイラク情勢と、そこに駐留している自衛隊の問題を提示した後、不自然に日本のニュースにつながる事がわかる。これは成田空港でのテロ対策に関するニュースで、成田空港で新しく導入されるテロ対策の現場を小泉首相が視察した、というものである。

このようにこの時期に報道された日本のテロ対策のニュースは、イスラム、主にイラ

図表5 2004年4月5日(月)NHK『ニュース10』 トランスクリプト

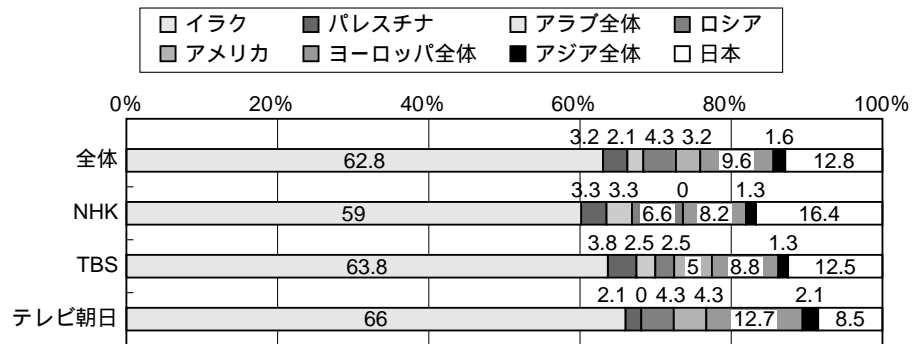
時間	項目	ニュース内容	登場人物	関連国
0:05:42	2 ①	シーア派、占領統治に反発 イラクで衝突、シーア派と駐留軍；反米強硬派サドル師の支持者がデモ、駐留軍と衝突、ナジャフで20人以上が死亡／バグダッドでも米兵8人、イラク人28人死亡／サドル師“より強硬手段を”と声明／	シーア派の男性	イラク アメリカ
0:07:03	2 ②	スタジオと現地・池畑修平記者のやりとり シーア派衝突続く。今日もバグダッドのサドルシティでは抗議のデモが続いている／バスラでは地元の行政府を占拠、駐留するイギリス軍とのにらみ合いが続く／暫定行政府のブレマー行政官、サドル師を強く非難	暫定行政府のブレマー行政官	イラク アメリカ イギリス
0:08:36	2 ③	反米強硬派サドル師とは ムクサダ・サドル師、30歳前後で宗教的権威は高くない／旧フセイン時代に殺害された父親は、有名なシーア派の指導者、フセイン政権崩壊後、バグダッド郊外のサダムシティがサドルシティに改められるほど人望が厚い／シーア派の最高権威は穏健派のシスターニ師／しかしサドル師は、反米強硬路線で支持を集め、武闘組織を抱えるために、米軍側は警戒を強めている。	サドル師	イラク アメリカ
0:10:06	2 ④	衝突の背景と今後の見通し 大野元裕・中東調査会上席研究員に聞く： シーア派は国づくりに参加できない／でも拡大はサドル師の勢力の強い地域に限られている／シーア派全体に拡大する可能性	大野元裕・ 中東調査会上席研究員	イラク
0:11:52	2 ⑤	バグダッドの池畑記者から報告 政権移譲は難しくなってきた／国連のブラヒミ特別顧問、各部族との対話を進めているが、シーア派への対応に苦慮している／シスターニ師がブラヒミ氏との対話を拒否している		イラク
0:13:16	2 ⑥	サマワから池光敏弘記者の中継 強硬手段を訴えるサドル師のピラが当地でも配られた／今のところ、呼びかけに呼応するような動きは出ていない／陸上自衛隊もいつも通り支援活動を続けている	サマワワ住民 (男2名)	イラク
0:15:28	3	成田空港のテロ対策 スタジオの鎌倉千秋アナのリポート：成田空港でのテロ対策を小泉首相が視察／午後1時20分、小泉首相ヘリコプターで到着／警備の実態；手荷物チェック、ペットボトルなどの液体を調べる装置が置かれた＝可燃物をチェック／先月から爆発物自動検知装置を設置／顔認証システム、個人を識別する装置を近い将来に導入／	小泉首相、 成田国際空港・ 福田朗さん、 成田国際空港保安警備部・ 松崎康弘さん	



クで発生するテロ事件や、紛争に関連させて報道される形式をとっていた。これは福田(2006b)も指摘するとおりである。つまり、日本のテロ対策のニュースはイスラムのニュースに隣接する形で編集されたのである。図表6のように、当時のニュース番組の国際ニュースで報道されたテロ問題報道のうち、7割近くがイスラム圏におけるニュースであることがわかるが、この国際ニュースの文脈で報道される日本のテロ問題報道も、ほとんどがイスラムのテロ報道に関連する形で登場したことが明らかとなった。このことは、いったいどのような意味を持つのであろうか。

Saidは、イスラムがアメリカのメディアに登場することは、何らかの危機的状況が発生したときに限られると批判している。「イスラムが、ヨーロッパやラテン・アメリカに詳しい学会や一般の知識人をも含め、大半のアメリカ人の意識の中に浸透してきたのは、石油、イラン、アフガニスタン、テロリズムなどニュース価値の高い問題と関係があるからであった」(Said: 1981 = 1986, p.41)と。このような状況は日本でもあまり大差がないといえる。テロ事件や戦争、紛争、エネルギー危機などの問題の関連でのみ表象され

図表6 国際ニュースにおけるテロ報道の中で登場した国の割合（福田：2006b参照）



るイスラムは、ニュース報道においてもこれらの危機と結束性を持ちながらセットで表象され、ステレオタイプ化されていくのである。

▶ 4 カテゴリカル・ワーク（成員カテゴリー化装置）で構成されるイスラム像

さらにテレビニュースにおいて、イスラム問題はどのように語られたのだろうか。テレビニュースにおいて、その問題が詳しく紹介される際に使用されるのは、専門家による解説である。当時のテレビニュースにおいて、イスラム問題を解説していた専門家は、大野元裕（中東調査会上席研究員）、酒井啓子（アジア経済研究所主任研究員）、高橋和夫（放送大学助教授）の3名に代表される。テレビ各局は彼らの専門的知識に依存しながら、ニュース番組におけるイスラム解説を多用した。Saidは、イスラム研究者の言動が、テレビニュースの中で非常に政治的な文脈のなかで利用されることを指摘している。

「イスラム」の専門家で、政府やいろいろな企業、マスコミのコンサルタントないし職員でなかったという者はほとんどいない。（中略）イスラムに関する言説は、まったく汚染されていないにしても、それが生まれた政治的・経済的・知的状況によって色がついているのは間違いない。

Said（1981 = 1986）p.10

そして彼はさらにこう批判する。イスラム研究の専門家も、文化的かつイデオロギー的に規定された枠組みにとらわれているため、イスラムの解説や紹介は非常に困難な作業であり、そしてそのフレームで濾過されたイスラム理解は歪曲されたものとならざるを得ない、と。確かに、Tuchman（1978）も指摘しているように、ニュース解説とは、価値観が入ってくる、「真実ではないかもしれないこと」を示している。Tuchmanは、ニュース解説とは価値観が含まれる客観的事実ではないものとして、その他の大半の客観的事実であるとされるニュースと区別されることにより、事実に基づく報道と解釈的な材料とが区別されているということを保証するための装置として機能していると指摘する。さらに、図表3のニュースでの高橋助教授の解説や、図表5のニュースでの大野研究員の解説は、これらのニュースにおけるアクター構造の全体図を超越した地位にある。つまり、ニュース解説とはこれらのアクター間の談話を引き受けた上で、それらの構造や問題性を整理して見せる役割を示す独特な談話であるということが出来る。

このような特徴を持つニュース解説がイスラムの問題をどのように表象したかを分析

するために、今回の分析対象となった2003年11月～2004年6月までの8ヶ月間に放送されたNHK『ニュース10』、TBS『ニュース23』、テレビ朝日『ニュースステーション』、『報道ステーション』の3番組の中で、この3名のイスラム解説者が登場したニュースを抽出した結果、NHK『ニュース10』で16本、TBS『ニュース23』で15本、テレビ朝日『ニュースステーション』で6本、『報道ステーション』で6本の、計43本であった¹⁾。今回はこの43本のニュースにおけるイスラム解説者の解説を会話分析の方法にのっとりトランスクリプト化して、分析を行った。

彼らの解説の中で、イスラムがどのように語られているか。会話分析における成員カテゴリー化分析(Sacks, 1972)を用いて、テレビニュースにおいて、イスラム問題がどのように解説されているか、イスラム解説の中で、どのようなカテゴリカル・ワークが生成しているかを考察する。専門家によるイスラム解説の談話を中心に、イスラム教という宗教的な問題、中東という地政学的な問題、アラブという人種的な問題、それらを総合した文化的問題の多様な視点から考察を行う。

4.1 カテゴリー化の混乱

3月3日(水)の『News23』で放送された、「アシュラでの爆弾テロ事件」報道において、放送大学の高橋和夫助教授は、この事件を以下のように解説している。高橋助教授の解説部分を会話分析の一般的なルールにのっとりトランスクリプトで示す²⁾。この解説も、全体のニュースの中で、ダイアロジカル・ネットワークとみなせる談話の流れの中で、会話的な構成を維持する解説として使用されている。

3月3日(水) TBS『News23』「アシュラでの爆弾テロ事件」解説 高橋和夫助教授(放送大学)

1. あ、今回のテロ：、アルカイダにしてみれば、これでシーア派とスンニ派が内戦状態になって混乱すればアメリカの統治はより混乱する、自分たちの活躍の場が出てくるという、そういう狙いだと思うんですね。
2. イラクの将来をどうするかという。まあ、基本法に関する同意がなされたばかり、ですよ。
3. このアシュラが終わったら調印しようと。そういう時期に。ee「異議あり：」というテロだと思いますね。
4. アシュラ：というのは。eeま、シーア派にとっては最大の宗教儀式なんですよ。
5. でこの30年間かなんか、nま、禁止されてたんで、宗教儀式を大々的にやるという宗教的な意義は大きいんですけど。
6. 同時にシーア派はこれだけ人がいるんだt、これだけ人を動員できるんだ：という、

脚注

1. イスラム解説の会話分析で使用したのは、以下の番組である。
 ・NHK「ニュース10」計16本(11月27日(木)、12月1日(月)、15日(月)、26日(金)、3月16日(火)、19日(金)、4月5日(月)、9日(金)、12日(月)、14日(水)、15日(木)、16日(金)、5月28日(金)、6月1日(火)、28日(月)、29日(火))
 ・TBS「ニュース23」計15本(11月25日(火)、12月1日(月)、4日(木)、1月15日(木)、2月9日(月)、3月3日(水)、15日(月)、4月6日(火)、9日(木)、12日(月)、13日(火)、14日(水)、15日(木)、16日(金)、6月2日(水))
 ・テレビ朝日「ニュースステーション」計6本(11月18日(火)、26日(水)、12月1日(月)、15日(月)、1月21日(水)、2月3日(火))

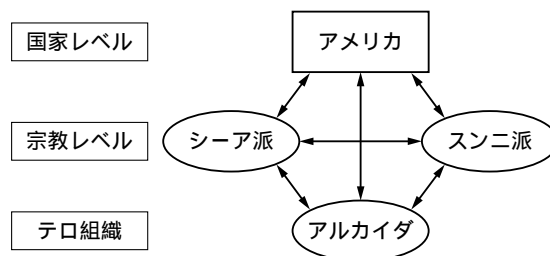
「報道ステーション」計6本(4月8日(木)、9日(金)、12日(月)、13日(火)、15日(木)、5月12日(水))
 2. 本論文で使用している会話トランスクリプトの記号は以下の通りである。
 ・: は音声ののびている状況をさす。複数の: はその相対的な長さを示す。
 ・「.」は1秒以下の沈黙、(.)は2秒以下の沈黙を示す。
 ・ee, hhは、言語以外の発声を示す。
 ・= は、発話と次の話者の発話の間がほとんど重なっている状態を示す。
 ・[は、会話同士の重なり(オーバーラップ)の始まり、]は重なり終わりを示す。

- あのアシュラは政治的デモンストレーションでもあるんですよ。
7. で、シーア派の力が、伸びている、(.) eeフセイン、没落以降のイラクを象徴したシーンなんですよ。
 8. そのフセ、eeフセイン、没落以降のイラクでシーア派の力を伸びているということに対する、牽制球がおそらくアルカイダの投げたであろう、テロの爆弾だっただろうと思うんですよ。
 9. あのまさに、あの：：イラクの将来をどうするかという、ロードマップの曲がり角で(.)テロがきたということですね。
 10. それなりの警戒はしてたようですけど、現地の人だけでなく、イランからも、パキスタンからも巡礼者がきますから、それに外国人、まあアルカイダのような人がシーア派を装ってやってきたら、ちょっと防ぎきれないですよ。
 11. で、この防ぎきれないことが、またある意味でシーア派のアメリカに対する憤りを強めているわけですよ。
 12. アメリカの占領当局として、イラクを統治している、責任者としてシーア派の安全を守る義務があるのに、守れないじゃないかと。
 13. ま、アメリカにとってもこのテロは痛いですね。

アシュラというシーア派最大の宗教祭典におけるテロ事件の背後に、どのような構造があるのかを、彼は解説している。今回のテロ事件を、アルカイダ系のテロ組織によるものとして、シーア派の宗教儀式的解説に軸足を置きながら、それに目をつけたアルカイダ系のテロ組織の意図と、それによって発生するシーア派とスンニ派の対立と混乱、そしてそれに対処を迫られるアメリカという構図を整理している。

この談話において、アメリカという国家に対置されているのはイラクという国家ではなく、むしろシーア派とスンニ派という宗教レベルのカテゴリーである。これはイスラム問題を構成するアクター構造における普遍的問題のひとつであるが、この構造はニュース解説という談話においても表象される。そしてさらにこの事件をもくろみ、宗教対立につけこむことによって、アメリカと対峙しているのはアルカイダというテロ・ネットワークであると解説されるが、これは国家カテゴリーとも宗教カテゴリーとも異なるアクターである。それぞれレベルの異なるカテゴリーが談話の中で相互作用しながら、ひとつの問題を構成している。このカテゴリー化の混乱こそが、イスラム問題の談話の特徴といえるだろう。ここでもアメリカという国家とアルカイダというテロ組織の間の非対称的闘争が、イスラム教という宗教のカテゴリー・ワークの中で位置づけられる構造が見て取れる。これらのカテゴリーの混乱と非対称性は、イスラム問題の考察のため

図表7 3月3日ニュースの高橋助教授解説によって表象されるカテゴリー



には避けて通れない問題のひとつであるといえる。

4.2 イスラムへの原因帰属

では続いて、11月27日(木)に放送された『ニュース10』におけるインタビューから、中東調査会の大野研究員の談話を例にとってトランスクリプト化してみよう。これはキャスターが大野研究員に対してインタビューしたものが編集されて使用されているサウンドバイトである。このようにインタビュアーとしてのキャスターと解説者との会話は、「質問 応答」のシークエンスとして成立し、「隣接対」(adjacency pair)を構成している。隣接対とは、2つ以上からの発話からなり、それぞれ異なる発話者から発せられるその発話が隣接的な位置にある状態のことを指す(Schegloff & Sacks; 1973)。ニュースにおけるインタビューもこのような隣接対として会話分析の対象として考察することができる。

11月27日(木)NHK『ニュース10』「イラクの復興問題」インタビュー 大野元裕客員研究員(中東調査会)

「今後のイラク情勢をどう見るか？」

1. A(キャスター): 大野さんはその: 治安状: 況のよくない. 今のイラクの情勢どういうふうにごらんになっていますか?
2. B(大野研究員): はい. あの: . イラクにおける治安の悪化は. 5月以降ずっと続いている話ではありますが. 最近では. 計画性. 組織性. それからaa人数の. テロに関わる人たちの人数の増加. この3つが: 特徴として挙げられると思います。
3. B: あの. 2つのo勢力が(.)今. 大きな流れになっていると思います。
4. B: 1つはaa戦争終結以降の(.)ooイラクでもっとも不満を抱く層. これはスンニ派トライアングルと呼ばれる地域. および大都市でテロの環境を作り上げ. さらにテロを実施してきたと思います。
5. B: で. こういったそのテロのやりやすい環境ができるにつれて. 国際的なテロ組織. あるいは国際テロ組織のやり方を模倣した. 国際テロ組織型のテロというものが. オーバーラップしてきている. それが今の現状で. その両方が(.)aラマダーン. イスラムの断食月. を契機により集中的で. しかもe人数をかけ. なおかつ被害者の多いテロを出すようなテロ行為を行っていると思います。
(中略)
6. A: hhhそうしますと. (.)その治安を回復する. そのテロをなくすためにはどういうことが必要ですか? =
7. B: = はい. ee鍵となるのは. aaイラク人が望むような復興を(.)実現できるかどうか. だと思います。
8. B: テロを行う環境. つまり人々が隠れ蓑を提供する. あるいは(.)銃をきちんとその現場で入手できる. さらに逃亡までも手助けする. こういったものがない場合には. テロリストは孤立化します。
9. B: で. こういう環境を(.)ooテロリストがテロを行いにくい環境をもたらすためには. イラク人の不満を解消することが大事. そのためにはイラク人の声が. イラク人民の声が. 政策にきちんと反映できるようなやり方. (.)イラク人の国作りの参加を促す. そして最後には. 目に見える復興をイラク人のもとに届ける. これが非常に重要なポイントになると思います。

大野研究員は、この解説の中で、「スンニ派」というカテゴリーと、「イラク人」というカテゴリーを巧みに使い分けていることがわかる。イラクを占領している「アメリカ」（トランスクリプトでは省略された部分に登場）に対立している勢力として、前半部分では「スンニ派」という宗教カテゴリーを対比して論じながら、後半部分では「イラク人」という国民カテゴリーを対比しながら論じている。このように、集会的にとらえることができるカテゴリーを用いて人物や現象を記述することを成員カテゴリー化（membership categorization）というが、この談話の前半部分では、「アメリカ」という国家と「スンニ派」という宗教カテゴリーが「関係対」(relational pair)を構成しており、後半部分では「アメリカ」という国家と「イラク人」という国民カテゴリーが関係対を構成している。この関係対のズレは何を意味するのであろうか。1つ目の質問への回答において、テロが「スンニ派トライアングル」と結びついている状況、さらにそれが「ラマダーン、イスラムの断食月」を契機としていることを示すことによって、スンニ派という宗教的カテゴリーがテロの問題と深く関わっていることを暗示していると解釈できる。その一方で、2つ目の質問への回答において、彼は「イラク人」というカテゴリーを、合理的で世俗的な判断ができる国民国家の構成員という文脈で使用していることがわかる。テロという問題と結びついているのは、あくまでもイスラム教という宗教カテゴリーであり、イラク人という国民カテゴリーではない、という使い分けが、暗黙の前提とされていることを読み取ることができる。ここで示されるのは、イスラムの問題を複雑にしている宗教の問題と、国民国家の問題は、談話レベルでも分断されており、その分断は談話においても使い分けられることにより、このイスラムの問題性を表象しているといえる。これらの談話には、このイラク問題を、宗教的コンテキストではなく、近代的国民国家としてのアメリカ合衆国とイラク共和国の問題、アメリカ人とイラク人の問題として合理的で、功利的なコンテキストで解決に結びつけることの必要性が表象されているといえる。

しかしながら大野研究員は、日本人3人が誘拐されたイラク人質事件が解決した4月15日(水)の『ニュース10』において、次のようにコメントしている。これはスタジオ内でキャスターと大野研究員が生放送で会話している内容のトランスクリプトである。

4月16日(水)NHK『ニュース10』「イラク人質事件解決」コメント 大野元裕上席研究員(中東調査会)

1. A(キャスター): e今夜は、中東調査会・上席研究員の、大野元裕氏とともにお伝えいたします。大野さん、よろしく[お願いします。]
2. B(大野研究員): [よろしくお願いします。]
3. A: 解放された。aa3人ですね、直後の3人。ご覧になっていかがでした? =
4. B: =そうですね。精神的にはやはりお疲れの様子でしたけれども。ただ見た限りでは(。)aa外傷等もなくですね、健康な様子で[ございました。]
5. A: [ええ]
6. B: でm恐らく。uuあその中nnにですね、高遠さんという女性が混じっていたというのがもしかすると。犯人が。aこの3人を丁重に扱ったひとつの理由かもしれない。
7. B: というのもですね。イスラム教では、aa女性のことをですね。非常にその丁寧に扱うんですね。
5. B: ちょうどあの。ま握手などもしないですね、eee高遠さんに対しては手も差し伸べずにクバイシさんが接していましたけれども(。)非常に女性のことを意識し

て保護する。それが1つの、大事にされた理由かもしれません。

ここで大野研究員は、日本人3名の人質が無事に解放されたことの原因のひとつとして、人質のひとりが女性であったことを挙げている。これはコメントとしてあくまでも推測の域を出ないが、その原因は「女性のことを非常に丁寧に扱う」イスラム教の文化であると指摘している。そしてその根拠として、クバイシ師が、人質の女性、高遠さんに対して握手もせず、手も差し伸べずに接していたことを挙げている。このように、ニュースのディスコースにおいて、発生するテロ事件に関して、常にその動機や背景が語られるときには、イスラム教やイスラム文化が参照されることとなる。テロ報道におけるこのイスラム教への原因帰属が、もっとも端緒なイスラム解説の機能であることがわかる。

イスラム問題にはイスラム教の文化や宗教のコンテクストを理解することは重要であり、それをもってイスラム問題の解決への糸口を探ることが、このテレビニュースにおける解説には要求されるが、このように、このイラク紛争の問題については宗教的コンテクストから引き離された合理的・功利的コンテクストにおいて問題解決がリードされる必要性を説きながらも、やはり問題発生への解説には宗教的・文化的コンテクストの動員を必要とするところに、イスラム解説の困難さがある。

4.3 リスク化するイラクの表象

イラク戦争とその復興段階の当初は、イラクとアメリカの当事者と比べるとやや他人事であり得た日本のメディアや世論も、自衛隊がイラクのサマワに派遣され、さらに自衛隊の撤退を要求する日本人質事件が発生すると、当時者性を増していくことになる。つまり、当事者としてのリスクを抱えた日本にとって、イラクやイスラムがリスクとして表象、認知されるようになるのである。

1月21日(水) テレビ朝日『ニュースステーション』「イラクでのデモ」

酒井啓子主任研究員(アジア経済研究所)

1. A(ナレーション): シーア派住民が多く住むイラク南部。その真っ直中に自衛隊は駐留している。
2. B(酒井研究員): デモに対する対処の仕方を間違えば、直接選挙を求めるというような。aデモだったのが、一転して外国軍の駐留に対する反対デモと、というような。ま排撃行為に: 変わっていく危険性は十分にあると思うんですね。

イラクでの直接選挙を求める大規模デモが発生したという1月21日(水)のニュースの中で、酒井研究員がコメントしているのは、このような現象も、自衛隊をイラクに派遣して、その復興支援が失敗すると、自分たちに向けた排撃行為に変わっていく危険性があるのだという、リスクの指摘である。つまり、復興支援する自衛隊、日本がイスラム問題の当事者となることによって、イスラムがリスクと化すことを示している。

2月9日(月) TBS『ニュース23』「自衛隊派遣問題」

酒井啓子主任研究員(アジア経済研究所)

1. いくつかの、部族がありながらも、しかし、皆ある意味で均等に、貧しいけれども平等な生活をしていた。
2. それが自衛隊という、あるいは日本というその外国がまあ、入ってくることで

て、e富のバランス、権力のバランスが大きく崩れていく危険性があるわけですね。

(中略)

3. 自衛隊が、まあ、aaいまあの：：イラ、あのサマワに来ることで、雇用を作り上げる。あるいは経済的なその(.) ooooま活性化、そうしたことに対する住民の期待が大変大きい。
4. そうなると、それにどこまで応えられるのか、応えられなかったときの失望感というものに対して、自衛隊はどのような風に対処していけるのかということ。
5. ま、いろいろな経済的な面でも、oo部族社会との関係との、という意味でも、大変やっかいな、a問題をこれから抱えていくことになるんだと思いますね。

さらに、2月9日(月)のニュースにおいても、自衛隊派遣がサマワの住民の期待に応えられないことによって、失望感に変わるというリスクを提示することによって、自衛隊派遣の問題点を指摘している。ここでは、雇用の問題という経済的で世俗的なフレームが使用されながらも、一方で、部族社会という土着的なイスラム文化のフレームが提示されることによって、この問題の多重なカテゴリー構造とその複雑性が指摘されている。同時に、イスラムが自分たちの存在と敵対する可能性を秘めた、危険性の問題として対象化されていることがわかる。

自衛隊がイラクに派遣されることによって、これらのイラク現地で発生するさまざまな現象が日本に直面するリスクとなることを、イスラム解説者がニュースにおいて解説することによって、イラクが日本にとってのリスクであることが表象されたといえる。イスラム解説者のニュース解説は、イラクが日本にとってのリスクであることをフレーム化することに役立ったのである。

▶ 5 おわりに

このように、イスラムの成員カテゴリーに関する談話は、「イラク人」といった国民カテゴリーや、「スンニ派」「シーア派」といった宗教カテゴリーが複雑にからみあいながら、テロリズムの問題と関連しあっていることがわかる。また、ダイアロジカル・ネットワークにおいても、アメリカ大統領やテロリスト、武装集団、イラク市民といった成員カテゴリーの談話が編集されてつながりあい相互作用している構造が明らかとなった。さらに「イスラム」というカテゴリーと、「テロリスト」というカテゴリーは、ニュース・ディスコースにおいてせめぎ合っている。テロリズムという問題もそうであるように、イスラムという問題も、テレビニュースなどのメディア上の言説における政治的カテゴリー化の問題に関係していることが、談話分析によって示されたといえる。Saidらの批判を受けて、日本のメディア、解説者、研究者はどのようにしてイスラムを語るべきか、という問題が常に問われている。本研究は、決してイスラム研究者の言動を一方的に批判するものではない。むしろ、本来、「イスラムを理解するため」にあるはずの、そのイスラム研究者による解説がさまざまなコンテキストの中でニュース報道によって利用され、そのニュース報道が談話として政治性を帯びながらオーディエンスの「イスラム理解」に影響を与えるその共犯関係を問題としているのである。イスラム報道によってイスラムを理解したつもりになっているオーディエンスの「我々」も共犯者のひとりである。

Said (1978) は、オリエンタリズムを批判する文脈のなかで、オリエンタリズムとは西洋が作り出した言説の問題であり、政治的権力や文化的権力、道徳的権力など多種多

様な権力との不均衡な言説の交換過程において生産されるものだとしている。

実は私が本当に言いたいことは、オリエンタリズムが、政治的であることによって知的な、知的であることによって政治的な現代の文化の重要な次元のひとつを表象するばかりか、実はその次元そのものであって、オリエントによりはむしろ「我々の」世界のほうにより深い関係を有するものだということなのである。
Said (1978 = 1993) 『オリエンタリズム』 p.41.

オリエンタリズムの問題と同じく、イスラムの表象の問題も、そしてイスラム理解の問題も、「彼ら」の問題ではなく、メディアを媒介して言説をコミュニケーションする「我々」の側の問題なのである。

参考文献

- Fairclough, N. (1995) *Media Discourse*, London : Arnold.
- 福田充 (2006a) 「テロリズムとマスコミ報道・メディア」テロ対策を考える会編 『テロ対策入門 偏在する危機への対処法』 亜紀書房, pp.63-90.
- 福田充 (2006b) 「グローバル・リスク社会を表象する国際テロ報道 2004年スペイン列車爆破テロ事件を中心に」 『メディア・コミュニケーション』 慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要, No.56, pp.109-128.
- 萩原滋 (2006) 「日本のテレビにおける外国関連報道の動向 (2003年11月～2004年8月)」 『メディア・コミュニケーション』 慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要, No.56, pp.39-57.
- 是永論・酒井信一郎 (2005) 「『広告』はいかにして『広告』に見えるのか 『メッセージ』としての『リスク』の理解に向けて」 三宅和子・岡本能里子・佐藤彰編 『メディアとことば2』, ひつじ書房, pp.100-130 .
- Leuder, I & Nekvapil, J. (2000) Presentations of Romanies in the Czech media : on category work in television debates, *Discourse & Society*, Vol.11, No.4, pp.487-513.
- Leuder, I., Marsland, V., & Nekvapil, J. (2004) On membership categorization : ' us ', ' them ' and ' doing violence ' in political discourse, *Discourse & Society*, Vol.15, No.2-3, pp.243-266.
- Necos, B.L. (1994) *Terrorism and the media : from the Iran hostage crisis to the World Trade Center bombing*, New York : Colombia University Press.
- Sacks, H. (1972) On the analyzability of stories by children. in J.Gumperz & D.Hymes (eds.) *Directions in Sociolinguistics*, New York : Holt, Rinehart & Winston, pp.325-425.
- Said, E.W. (1978) *Orientalism*, Georges Borchardt Inc., New York. E.W.サイド (1993) 『オリエンタリズム (上・下)』 板垣雄三・杉田英明監修, 今沢紀子訳, 平凡社ライブラリー .
- Said, E.W. (1981) *Covering Islam : How the media and the experts determine how we see the rest of the world*. Pantheon Books, a division of Random House, Inc., New York. E.W.サイド (1986) 『イスラム報道』 浅井信雄・佐藤成文訳, みすず書房 .
- Schegloff, E. & Sacks, H. (1973) Opening up closings, *Semiotica*, 7, pp.289-327 =(1974) Roy Turner (ed.) *Ethnomethodology*, Middlesex : Penguin, 223-264. (1989) 「会話はどのように終了されるのか」 北澤裕ほか訳 『日常性の解剖学 知と会話』 マルジュ社, pp.175-241.
- Tuchman, G. (1978) *Making news*, The Free Press. G.タックマン (1991) 『ニュース社会学』 鶴木真・櫻内篤子訳, 三嶺書房 .
- Van Dijk (1988) *News as discourse*. Lawrence Erlbaum Associates, Inc.

(福田 充 日本大学法学部助教授)